

国産材 原木輸出量 V字回復で高水準に

中国向けで数量伸ばす

瀬崎林業

瀬崎林業(大阪市、遠野嘉之社長)の2023年原木輸出量が19万立方メートル程度となる見通しだ。20年の過去最高実績約20万6000立方メートルには及ばないが、過去2、3番目の高水準は確実となった。23年は1～10月実績が約14万6000立方メートルで、既に契約済みの11、12月は数量を大きく上積みする予定。主要輸出先である中国向けで数量を伸ばした。

同社の23年の中国向け立方メートルを越え、安定し

は10月までの実績が約11万5000立方メートルとなった。22年の年間実績は既に戻上回っている。22年は世界情勢不安や中国の景気減退で原木輸出全体が落ち込んでいた。また台湾向けの23年10月までの実績も3万

立方メートルを越え、安定している。19万立方メートル程度という同社の年間総輸出量見通しは、21年並みに回復するところになる。同社によると、中国市場は他国からの原木輸入量が減少し、一方で日本からの輸入量は増加しているという。

これは杉に対する品質や供給の安定性、日本から中国への短納期などが要因だ。中国経済は依然停滞感がぬぐえないが、同国の原木輸入に関しては、上海周辺の各主力港における原木港頭在庫が270万立方メートルと低水準。適正水準の目安の

1つとなる400万立方メートルを下回る。この在庫状況に加え、中国側の輸入体制の変化も影響しているという。従来の現地商社による買い付けだけでなく、問屋が直接輸入するケースも増えた。こうした問屋は中国国内での販路拡大に積極的で杉の仕入れ意欲も強い。土木用やパレット、建築下地材などでの販路を広げている。一径級や品質などの要求は細かく異なるが、価格は高めで取引できる(同社)。24

年1月積み価格も小幅ながら値上げで契約しており、同社は年明け後も堅調な輸出を予想している。

同社は原木輸出事業を10年から手掛け、近年は九州中心に8港で安定した実績がある。また主力集材地の九州では、北と南の両エリアで人員を増やし営業体制を拡充した。

遠野社長は今後の事業体制について「より林業に近付いていき

い」と話し、原木仕分けなど素材生産者の支援にもなる取り組みも見据えている。

同社では原木輸出の中心。合板・LVLの販売量は年間約23

00立方メートルで、本格的に取り扱いを始めた19年ごろと比べ、数量は2倍以上に成長している。